

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380627

研究課題名(和文) 内部統制監査制度の理論・規範・実証・実験分析

研究課題名(英文) A study on an auditing for internal control from the viewpoint of theoretical, archival and experimental research

研究代表者

灌田 輝己 (TAKITA, TERUMI)

同志社大学・商学部・教授

研究者番号：90131276

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、我が国でも重要な課題といえる内部統制報告制度およびその監査制度の意義ないし制度的な効果について、理論研究、規範研究、実証研究、および実験研究という4つの研究方法からアプローチすることを目的とするものである。そして、具体的な検討対象である内部統制監査制度の意義や効果を各方法論から多面的に分析してだけでなく、各研究方法の根底にある基本的な立場を明らかにし、究極的には、監査研究における各研究方法の相互理解ないしコラボレーションの可能性を模索していくことを目指すものであった。3年間のプロジェクトの結果、多面的な方法論から、ワークショップ開催、学会発表、論文執筆をおこなうことができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to study the significance of the internal control auditing system. Especially our great feature is an approach from the four methodologies. Through three years of the project, we had workshops, conference presentations, and some research papers.

研究分野：会計学

キーワード：会計 監査 内部統制

1. 研究開始当初の背景

本研究は、我が国の内部統制報告制度およびその監査制度（以下、単に「内部統制監査制度」と略す）の意義ないし制度的な効果について、「理論研究（モデル分析）」、「規範研究」、「実証研究」、および「実験研究」という4つの研究方法からアプローチすることを目的とするものである。なお、本研究は、日本会計研究学会特別委員会『監査論における現代的課題に関する多面的な研究方法についての検討』（平成23年10月-平成25年9月）での予備的活動をその基礎としている。

これまで、監査論の分野では、共通の研究対象でありながら、研究方法が異なるということから、各研究者の研究成果が、ほぼ研究方法の違いごとに分離分類されて評価されてきた感がある。その結果、監査研究者にとって、自らの研究上の立場が広く理解されずに、視野の狭いものであるという批判を甘んじて受けなければならない状況がしばしば見られた。

しかしながら、異なる研究方法を相互に理解することができれば、同一の研究対象をより多面的に理解することができるし、また、方法論上の相違から生ずる不必要な議論を排除し、より意味のある論議をなすことができるため、その研究水準も確実に高まることが予想される。そして実際、財務会計領域では、このような方法論に関する議論はこれまで数多くなされてきた（例えば、Demski 2007）。しかしながら、監査領域においては、このような議論はそれほど活発になされてこなかったように思われる。

我々は、こうした問題意識をもとに、平成23年10月から約1年間、監査研究を暫定的に「理論研究（モデル分析）」、「規範研究」、「（アーカイバル型）実証研究」、「実験研究」に分け、各研究方法の根底にある基本的な立場（価値基準など）を明らかにするとともに、各研究方法の限界や各研究方法間の異同を明確化する予備的検討を行ってきた。そして、我々は、その暫定的な成果を、2012年8月30日日本会計研究学会全国大会（於一橋大学）における特別委員会報告『監査論における現代的課題に関する多面的な研究方法についての検討』（委員長：瀧田輝己）およびその『中間報告書』（全143頁）において明らかにした。

しかしながら、我々は、そのような予備的検討を行う中で、このような方法論上の議論は、個別具体的な経済事象ないし経済制度を検討素材として再検討されなければならないということを感じた。つまり、具体的な経済事象や制度に対して、理論、実証、実験、規範という異なる視点から同時にアプローチし、具体的なコラボレーションを図ることで初めて方法論上の議論は実りあるものになると思われるのである。

そこで次に我々が「具体的な検討素材」として注目したのが、我が国の内部統制監査制

度である。すなわち、内部統制監査制度は、その導入の段階から、理論的意義や制度のコストベネフィットなどを巡って、様々な議論がなされてきた。そして現在は、実際に制度が導入されてから数年が経ったこともあり、実務の場においても一定の落ち着きが見られるようである。そしてそのような落ち着きが見られる現在だからこそ、改めて、内部統制監査制度の意義や効果を改めて検証していく作業が求められると考えられるため、我々は、内部統制監査制度について、4つの視点からアプローチすることにする。

参考文献：Demski, J. S. (2007) "Is Accounting an Academic Discipline?" *Accounting Horizons*, Vol.21, No.2, pp.153-157.

2. 研究の目的

本研究は、我が国でも重要な課題といえる内部統制報告制度およびその監査制度の意義ないし制度的な効果について、「理論研究（モデル分析）」、「規範研究」、「実証研究」、および「実験研究」という4つの研究方法からアプローチすることを目的とするものである。そして、具体的な検討対象である内部統制監査制度の意義や効果を各方法論から多面的に分析していくだけでなく、各研究方法の根底にある基本的な立場を明らかにし、究極的には、監査研究における各研究方法の相互理解ないしコラボレーションの可能性を模索していくことを目指すものである。

3. 研究の方法

我々は上述の問題意識から、具体的には、以下の4点を明らかにしていく。なお、以下の4つの課題は、前述の予備的調査（2012年8月30日日本会計研究学会全国大会（於一橋大学）における特別委員会報告『監査論における現代的課題に関する多面的な研究方法についての検討』（委員長：瀧田輝己）およびその『中間報告書』（全143頁）を踏まえて、方法論間のコラボレーション可能性を見据えたかたちで有機的に関連している。

「課題 A：内部統制監査制度の規範的前提と意義」

内部統制監査制度とはそもそも一体何であり、どのような規範的前提に立つものか。また、監査人にはどのような倫理的視点が必要とされるのか。

「課題 B：内部統制監査制度の効果に関する理論的予測（経済的帰結）」

内部統制監査制度の効果や帰結としては、理論的にはどのようなものが予想され得るのか。

「課題 C：内部統制監査制度の実際の効果測定」

内部統制監査制度が我が国にもたらした実際のパフォーマンスはどうか。特に、コストに見合う便益が得られているのか。

「課題 D：内部統制監査制度の監査判断と制度設計」

内部統制監査制度全体のパフォーマンスの背後にある監査人の実際の監査判断は、制度が予測したものだったのか（理論が予測していなかった意図せざる帰結は生じていなかったか）。

そして上記の課題に関する規範（課題 A）理論（課題 B）実証（課題 C）および実験（課題 D）分析を通じて、監査研究における方法論のコラボレーションのあり方を提示していく。

4. 研究成果

本研究プロジェクトの具体的目標は、具体的な検討対象である内部統制監査制度の意義や効果を各方法論から多面的に分析しただけでなく、各研究方法の根底にある基本的な立場を明らかにし、監査研究における各研究方法の相互理解ないしコラボレーションの可能性を模索していくことを目指すものであった。3年間のプロジェクトの結果、特にを中心にして、多面的な方法論から、ワークショップ開催、学会発表、論文執筆をおこなうことができた。そのことを基礎にして、を考えるためのきっかけづくりは出来たものと思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 19 件)

上枝 正幸 2016

「会計コミュニケーションを研究する 過去・現在・未来」

『青山経営論集』50-4、21-40、査読なし

Masumi Nakashima and Shin'ya Okuda 2016
Implication of Internal Controls System and Accounting Information System

『オイコノミカ』52-2、17-44、査読なし

瀧田 輝己 2016

「内部統制監査制度についての一考察」

『税経通信』71-4、147-156、査読なし

Fumiko Takeda and Takeshi Watanabe 2016.
Corporate Governance and Stock Prices of Japanese Firms Adopting International Financial Reporting Standards.

『同志社商学』67-4、35-47、査読なし

田口 聡志、上枝 正幸、三輪 一統 2016

「契約支援機能における会計の質に関する

理論と実験の融合に向けて」

『同志社商学』67-4、35-47、査読なし

田口 聡志、村上 裕太郎 2016

「タックス・コンプライアンス実験研究の現状と展望」

『同志社商学』67-5・6、19-44、査読なし

田口 聡志 2015「実験制度会計論序説」『同志社商学』66-5、333-349、査読なし

田口 聡志 2015「社会的ジレンマ問題としての監査の品質監理体制」『同志社商学』66-6、295-311、査読なし

Kenichi Yazawa 2015

The incentive factors for the (non-) disclosure of material weakness in internal control over financial reporting: Evidence from J-SOX mandated audits

International Journal of Auditing 19,103-116、査読あり

Shin'ya Okuda and Masumi Nakashima 2015
Systems Integration, Management Involvement and Quality of Internal Controls and Auditing
Asia-Pacific Management Accounting Journal, 10-1, 1-22、査読あり

田口 聡志 2015

「会計と実験：未来をデザインする会計」

『季刊企業経営』132、12-15、査読なし

上枝 正幸 2015

「実験研究とディスクロージャー研究<その1>」

『青山経営論集』50-3、55-78、査読なし

原田 保秀・矢部 孝太郎 2014

「会計不正の抑制と倫理 道徳性発達理論に基づく合理的意思決定モデルによる分析」

『四天王寺大学紀要』57、137-159、査読なし

Zhenyang Bai, Manabu Sakaue, and Fumiko Takeda 2014

The Impact of XBRL Adoption on the Information Environment in Japan

Japanese Accounting Review 4, 49-74、査読あり

Yoshie Saito and Fumiko Takeda 2014
Global Audit Firm Networks and Their Reputation Risk.

Journal of Accounting, Auditing & Finance, 29, 203-237、査読あり

Riku Nishizaki, Yudai Takano, and Fumiko Takeda 2014

Information Content of Internal Control Weaknesses: The Evidence from Japan
International Journal of Accounting, 49, 1-26, 査読あり

上枝 正幸 2014

「会計学のコミュニケーション研究に向けて コミュニケーション学/論の援用可能性の探索」

『青山経営論集』49-2、17-37, 査読なし

上枝 正幸 2014

「わが国の会計コミュニケーション研究の回顧と展望」

『青山経営論集』49-3、81-99, 査読なし

上枝 正幸 2014

「企業の情報開示(ディスクロージャー)と会計コミュニケーション研究」

『企業会計』66-12、79-83, 査読なし

[学会発表](計7件)

田口 聡志

Experiments on Strategic Interactions between entrepreneur and Underwriter
行動経済学会第9回大会、招待講演、近畿大学、2015年11月28日

Kenichi Yazawa

Are Big N and industry specialist premiums associated with the size and composition of audit teams?

27th Asian-Pacific Conference on International Accounting Issues
InterContinental Sanctuary Cove Resort, Goldcoast, Australia

2015.11.1-11.4

Fumiko Takeda and Takeshi Watanabe

Corporate Governance and Stock Prices of Japanese Firms Adopting International Financial Reporting Standards.

The APC (Asian Pacific Conference on International Accounting Issues) Annual Meeting

InterContinental Sanctuary Cove Resort, Goldcoast, Australia

2015.11.1-11.4

Fumiko Takeda

Corporate Governance and Stock Prices of Japanese Firms Adopting International Financial Reporting Standards.

the 2015 AAA (American Accounting Association) Annual meeting
Hyatt Regency Hotel Chicago, Chicago, IL, USA.

2015.8.8-12

Fumiko Takeda

Corporate Governance and Stock Prices of Japanese Firms Adopting International Financial Reporting Standards.

the 2015 CAAA (Canadian Academic Accounting Association) Annual meeting
Hilton Tronto Hotel, Toronto, Canada

2015.5.28-31

上枝 正幸

「実験研究とディスクロージャー研究」

日本ディスクロージャー研究学会招待講演、名古屋市立大学、2014年12月20日

灌田 輝己

「監査論における現代的課題に関する多面的な研究方法についての検討(最終報告)」
日本会計研究学会全国大会、中部大学、2013年9月4日

[図書](計3件)

田口 聡志 2015. 『実験制度会計論』中央経済社、全266頁

灌田 輝己 2014. 『体系監査論』中央経済社、全358頁

灌田 輝己編 2013. 『監査論における現代的課題に関する多面的な研究方法についての検討(最終報告)』日本会計研究学会特別委員会最終報告書、全193頁

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

瀧田 輝己 (TAKITA, Terumi)
同志社大学・商学部・教授
研究者番号：90131276

(2)研究分担者

田口 聡志 (TAGUCHI, Satoshi)
同志社大学・商学部・教授
研究者番号：70338234

太田 康広 (OHTA, Yasuhiro)
慶應義塾大学・経営管理研究科・教授
研究者番号：70420825

福川 裕徳 (FUKUKAWA, Hironori)
一橋大学・商学研究科・教授
研究者番号：80315217

上枝 正幸 (UEEDA, Masayuki)
青山学院大学・経営学部・教授
研究者番号：20367684

武田 史子 (TAKEDA, Humiko)
東京大学・経済学研究科・准教授
研究者番号：70347285

椎葉 淳 (SHIIBA, Atsushi)
大阪大学・経済学研究科・教授
研究者番号：60330164

矢澤 憲一 (YAZAWA, Kenichi)
青山学院大学・経営学部・准教授
研究者番号：70406817

奥田 真也 (OKUDA, Shinya)
名古屋市立大学・経済学研究科・准教授
研究者番号：40351431

原田 保秀 (HARADA, Yasuhide)
四天王寺大学・経営学部・教授
研究者番号：20331720

矢部 孝太郎 (UEEDA, Masayuki)
大阪商業大学・総合経営学部・准教授
研究者番号：20411465

(3)連携研究者

()

研究者番号：